梅崎春生「つむじ風」における三組の男女

―戦後の〈男女平等〉そして日米関係―

高木伸幸

はじめに

梅崎春生の長編小説「つむじ風」は、昭和三十一年三月二十三日から同年十一月十八日まで、『東京新聞』に連載された[1]。松平家の御曹子と自称する嘘つき男・陣内陣太郎を主人公に据え、彼が出会った人々より次々と金銭を巻き上げ、騒動を起こし、春先の〈つむじ風〉のごとく、最後は遁走する物語である。

日沼倫太郎は、この「つむじ風」をいち早く書評に取り上げ、「わらいの効果というものを、めんみつに計算し」「読者をたのしませてくれる」「たいへん、オモシロイ小説」と評した（「書評・梅崎春生著『つむじ風』」、昭和三十二年六月『新日本文学』）。以来、今日まで「つむじ風」は、ユーモアあるエンターテイメント小説として高い評価を得ている[2]。

同時にこの「つむじ風」は、松平姓を騙る主人公に周囲の人々が振り回されるその設定により、いわゆる「諷刺小説」としても評価されている。例えば和田勉は「家柄に弱い庶民の俗物性」や「実態のない家柄の無意味さ」を「諷刺している」と論じた[3]（『梅崎春生の文学』昭和六十一年十一月、桜楓社）。

新聞小説である「つむじ風」は、なるほど読者を楽しませる大衆性において、梅崎春生文学の中でも屈指の作品であり、そのエンターテイメント的要素の奥に、確かに「家柄」に関わる諷刺性も存在する。これら先行評は、この小説の特色を的確に言い当てている。

しかし「つむじ風」には、主人公陣内陣太郎に加えて、彼と関わる多くの人々が登場し、主軸となる陣太郎の物

語と併せて、彼ら脇役たちそれぞれの物語も描き込まれている。それだけに、この小説は、陣太郎のみに注目した一面的な考察では不十分であり、より多面的な分析が必要と言える。特に諷刺性については、脇役たちの言動や人物像に焦点を当てることで、従来の論考と異なる、新たな解釈ができよう。

本論では脇役として描かれる三組の男女関係を取り上げる。これら三組の男女関係には、終戦後の日本社会の一側面が鋭く諷刺され、その先の予見まで為されている気配がある。以下に考察を進めたい。

一―(1)

「つむじ風」では、浅利圭介とランコ、猿沢三吉と西尾真知子、加納明治と塙佐和子の三組の男女が脇役として登場する。

浅利圭介は三十九歳。物語の冒頭で陣内陣太郎が自動車にはね飛ばされる事件に遭遇し、その車のナンバー「三・一三一〇七」を目撃した。彼は陣太郎とともに犯人を探し金を引き出す計画を立てる。しかし圭介自身は儲けを得るどころか、陣太郎からさんざん自分の酒を飲まれる始末であった。ランコは圭介の妻である。

猿沢三吉は銭湯・三吉湯の主人で、五十二歳。西尾真知子は彼が囲っている〈学生メカケ〉である。三吉は陣太郎をはねた犯人でないが、偶然にも同じナンバー「三・一三一〇七」の車を持ち、陣太郎の訪問を受ける。陣太郎に真知子を囲っていることを察知され、金を次々と脅し取られる。

加納明治は五十歳の小説家で、ナンバー「三・一三一〇七」の自動車で陣太郎をはねた張本人。陣太郎に突き止められ、やはり次々と金を脅し取られる。塙佐和子は、彼の秘書兼助手である。

これら三組について、男性のみに注目した場合、程度の差はあるが、いずれも陣太郎が騙る松平姓に関心を抱き、その所為もあって、みな陣太郎から損害を被っている。先に挙げた和田勉に代表される先行評は、彼ら男性と陣太郎の関わりに重点を置いた「諷刺性」の考察であった。対して本論では、彼ら三人とも、対陣太郎だけでなく、それぞれ女性たちとの関わりもあることに注目し、それ

ら男女関係に焦点を当てた考察をしたい。

なお「つむじ風」には、右三組以外にも、猿沢三吉の長女一子と、三吉湯のライバル泉湯の一人息子竜之助の二人が恋人関係として登場する。また陣太郎と真知子の二人も物語終盤では恋人関係となり、最後は一緒に逐走している。これら二組の男女は、四人とも二十代――竜之助は「二十五歳」、一子は「二十歳」、陣太郎は「二十七、八」、真知子はあと一年で卒業の大学生――で、右三組の男女とは世代から異なる。また竜之助と一子は、親同士対立する男女として、「悲恋」をユーモラスに表す狙いもあろう。これら二組は、右三組とは表現意図が明らかに異なるため、今回は対象から外す。

考察する三組の男女関係を少し詳しく見てみよう。

まず浅利圭介とランコ。二人が「結婚式をあげたのは」「昭和十六年十二月八日」。以来、妻ランコは夫の圭介に「階級的にも」「偉くなっていただきたい」と願う。圭介の応召中、ランコは「夫を立派なシコのミタテに仕立てたい」と考えるが、圭介本人は軍隊内で「幹部候補生の試験」を「自発的におっこちた」。終戦後ランコは「カツギ屋」として「実に逞しく生き」る一方、復員した圭介は「健康を、回復させるため」「ランコの稼ぎによりかかって徒食をしていた」。その後も「偉い人になって」と願う妻に反して、圭介は「あれこれの職についたが、どういうわけか圭介が職につくと、間もなくその勤め先がつぶれてしまう」。「長くて一年、短いのになると、入社して一ヵ月目に解散という」状態。やがてランコは「圭介をエラブツに仕立てようとの努力を打ち切」り、代わりに「長男圭一」を「エラブツに仕立てよう」とする。さらにランコは「空いている部屋を、他人に貸し」て「下宿屋」を始めるため、圭介から「書斎」を取り上げ「納戸にうつ」らせる。その上「三千円」の「部屋代」を徴収、一食「五十円」の食費まで払わせる。

次いで猿沢三吉と西尾真知子。「生涯に一度メカケを囲ってやろうと考えてい」た猿沢三吉は、アルバイトサロン（注、ホステスをアルバイトが勤め、当時全国的ブームとなっていた酒場[4]）で働いていた国文科の大学生、西尾真知子を〈学生メカケ〉として囲うことができた。真知子は自分がメカケとなるにあたって条件を掲げる。

「一、衣食住を保証すること、二、学資を出して呉れること、三、以上の他に毎月こづかいとして一万円呉れること、四、支度金として三万円呉れること」。もう一つ「大学を卒業するまで」という「任期」もあった。大学生である真知子にとって、「メカケ」はあくまで「アルバイト」。それ故、三吉が訪れても学業を理由に真知子から「拒絶」されることもある。三吉が毎月の小遣いを五千円に減額しようとすれば、三吉の妻ハナコのもとへ「いただきにあがるわよ」と、真知子より逆に「脅迫」される。「メカケというものは、今までの通念では旦那の道具なのだが、真知子は学業を完遂するために、逆に三吉を道具視している趣きがある」。

さらに加納明治と塙佐和子。この二人については次節で詳述したいが、掻い摘んで記せば、塙佐和子が加納明治の「生活の周辺にさまざまの改革」をほどこし、その「塙女史の理想主義的な改革」に対して、次第に加納明治は不満を抱き、反発を試みるも塙女史は全く屈せない。加納明治はクビにすることもできず、結局「屈伏したもの」と見做される。

梅崎春生は、これら三組の男女関係を、どのように創り上げたのだろうか。「つむじ風」の登場人物の中、陣内陣太郎にモデルの存することは既に明かされている[5]が、実はこれら三組についても、前者の二組には、モデルとまでは言い難いが、創作の典拠を求めることができる。

例えば梅崎春生は長編小説「砂時計」（昭和二十九年八月～三十年七月『群像』）執筆の際、『朝日新聞』記事から多くの材料を取っていた（拙論「梅崎春生『砂時計』論―重層表現による社会諷刺―[6]」、平成二十四年三月『国文学攷』第213号）。また「つむじ風」でも泉湯と三吉湯の対立、ことに湯銭値下げ競争の設定については、「フロ銭騒動 12円でガン張り通す」との見出しを掲げた『朝日新聞』記事[7]がその材料と言える。梅崎春生が『朝日新聞』記事を一つの創作の情報源として用いていたことは確実であり、「つむじ風」の男女関係においても、浅利圭介とその妻ランコ、猿沢三吉と〈学生メカケ〉真知子の二組を描くために、やはりそこから想を得ていたと見られる。二組とも「ある生活」と題する『朝日新聞』

連載記事に拠り、前者にはその第十九回が、後者にはその第二十六回が、以下のごとく、それぞれ活用されているのである。

「ある生活」第十九回は「つむじ風」連載開始より約二週間前の昭和三十一年三月十一日に掲載され、「街頭宝クジ売り 酒井きく子さん」の毎日を取り上げている。中でも「きく子さん」の夫について、「職業に関しては運の悪い夫で、区役所ではいつまでも下積みだからと中島飛行機会社にかわったが終戦後解散となり、今度はある公団の事務員になったが、それもやがて解散、失業を何度も経験し」、身体検査の結果「胸を少しやられている」ことも判明、「就職しても軽労働しかでき」ないと記す。そのため「きく子さんは」「いっしょうけんめいに内職にせいを出し」、やがて冬の寒さや夏の暑さにも耐えて「荻久保駅前」で「宝クジを売る」ようになった。加えて「彼女（きく子さん）は終戦のあと、借家の四間のうち一間を陸軍大佐の未亡人に貸した」。浅利圭介とランコの夫婦関係において、健康回復のため、そして失業続き故に、夫が妻の稼ぎに寄りかかるその設定は、明らかにこの記事を土台に創られていよう。特にランコが下宿屋を始める部分は、「きく子さん」が「一間を」「貸した」事実の発展と推察される。

一方「ある生活」第二十六回には、「アルバイト学生鈴木美和子さん」の毎日が紹介されている。「父が技師をしている宇部の小工場は不況で遅配つづき」のため、鈴木美和子さんは「いろんなアルバイトをや」り、「自分で働き、その金で学業をつづけている」。対して「つむじ風」では、「真知子の実家は九州にあるのだが、学なかばにして、親爺の工場がつぶれた。そこで真知子は、学業を中止するか働きながら続けるか、その二つの中の後者をえらんだのである」と記す。父親が勤める「工場」の不振により、自分で働きながら学業を続けるアルバイト女子学生というイメージにおいて、後者の「真知子」には、前者の記事の影響が認められよう。もっともこれ以上、真知子の人物像と記事との具体的な一致は見られないが、「つむじ風」連載当時、〈学生アルバイト〉は、世間でもしばしば話題に取り上げられており、それに関わる記事は他にも多く見られる[8]。そうした〈学生アル

バイト〉に対する世間の注目度や、多くの新聞記事と併せて、「ある生活」第二十六回が、真知子像の形成の一端を担ったことは確かであろう。また「宇部」から「九州」へ、「工場」の位置に変化が見られるが、この違いは表現上の工夫とも取れる。「宇部」は東京方面の読者にはやや馴染みが薄く、山口県でも九州寄りに位置することから、梅崎はそれを少し西側に移動させ、自らの故郷でもある「九州」と記した。読者にはわかりやすく、自身には親しみやすい表現へ改めたのである。なお「つむじ風」において、真知子が「アルバイト」の「学生メカケ」として初めて登場するのは、後述するように、昭和三十一年六月十三日付『東京新聞』掲載の連載第八十二回であり、「ある生活」第二十六回は、それより約一カ月前の三十一年五月十三日、つまり梅崎春生が真知子創作の材料を渉猟していたであろう時期に発表されたことも加えておく(21)。

一―(2)

さらに梅崎春生が捉えたモチーフをより的確に把握するためにも、これら二つの記事には、ある共通した部分が認められることに注目したい。どちらの記事も、忍耐力や「ガン張り」など、夫や父親に頼らぬ女性の意志の強さが前面に押し出されていることである。特に第十九回の記事においては、「酒井きく子さん」に比して、夫の病弱さも記されていた。おそらく梅崎春生は、戦後を生きる女性たちの強さ、逞しさに関心を寄せ、むしろ男性が弱いと感じていたのであろう。だからこそ、これらの記事が目に留まったのに違いない。そして梅崎はその〈女性たちの強さ〉をより同時代的に膨らませることで、加納明治と塙佐和子を含めた、三組の男女関係を創り上げたと言えよう。

すなわち「つむじ風」に描かれた三組の男女は、いずれも女性が男性をその気性の強さで圧倒している。三組とも女性が男性より優位に立った力関係である。

こうした男女関係は表面上、ユーモア・エンターテイメント小説の常套手段に倣ったものと見られる。男が女にやり込められ、虐げられる姿を描くことで滑稽感を醸し出し、読者を笑わせようとしているのである。しかし、

そのユーモアの奥まで踏み込んで捉えると、これら三組の男女関係を通して、戦後十年間の日本社会に漂う空気の一斑が映し出されているのが見えてくる。

敗戦後の昭和二十一年十一月、「法の下の平等」を謳う新日本国憲法が公布され、〈男女平等〉が実現された[10]。これより先の二十年十二月、衆議院議員選挙法改正により、「婦人参政権」が認められ、翌二十一年四月の衆議院選挙で初の女性議員三十九名が誕生した。二十二年十月には刑法改正により、それまで女性だけ罰則があった「姦通罪」を廃止。さらに二十三年四月十日に初の「婦人の日」大会が実施され、翌二十四年には、四月十日から一週間、「もっと高めましょう、わたしたちの力を・地位を・自覚を」のスローガンの下に「第一回婦人週間」が行われた。

敗戦から「つむじ風」連載に至るまでの十年間、日本国内で女性の地位は大幅に高められた。ただし〈男女平等〉と言っても、あくまで法律上で、特に職場においては、依然として多くの女性が冷遇されたままであった。それでも戦前と較べて、日本社会が女性を大切に考えるようになり、中でも家庭内での男女関係、つまり夫婦関係が大きく変化したことは確実である。この期間にベストセラーとなった伊藤聖のエッセイ「女性に関する十二章[11]」（昭和二十八年一月～十二月『婦人公論』）を見ると、「近ごろは恐妻会とか、愛妻会とかが作られ、民主主義の世の中になってから、急に細君たちが威張りだし、亭主を圧迫しだしたような印象を世間に与えているようである」と記されている。

「つむじ風」に描かれた三組の男女には、中でも夫婦である圭介とランコには、このような時代の空気が、読者を笑わせる目的もあって、やや大げさに反映されているのである。

いま少し具体的に、この小説の男女関係を確かめてみよう。

例えば下宿屋を始めようとするランコと、圭介が口論する、次のような場面がある。

（圭介）「するとお前は、下宿屋のおばさんになるのか？」

（中略）

（ランコ）「だってこの家は、あたしの家なんですからね。何をやろうと、誰の指図も受けません！」

（中略）

「へえ。これ、お前の家かねえ」

「そうですよ。ちゃんとあたしの名義になってるじゃないの！」

そう言われれば、言い返すすべもない。

召集令状が来た時、圭介は残される新妻のあわれさを思いやり、かつまた万一の事態をも考えて、大急ぎでランコの名義に直しておいたのだ。そのたたりが、十数年経った今になってあらわれようとは、神ならぬ身の知る由もなかった。

ランコは三度畳をたたいて言いつのった。

「そうよ。ここはあたしの家よ。あたしがこの家の主人よ！」

「すると、僕はこの家の主人ではないと言うのか？」

「もちろんよ。あくまで主人の座に執着するなら、その前に主人としての働きを見せてちょうだい！」

（中略）

「よろしい。この家の主人の座は、お前にあけ渡そう。仕方がない」

ここでランコが「この家の主人」を主張しているのは、直接には応召時における圭介の配慮により、家の名義が圭介からランコへ書き換えられていたことを指す。しかし「主人の座」を「畳をたたいて」まで強調するランコ。反対に「仕方な」く「主人の座」を「あけ渡そう」と言う圭介。それぞれの言葉の奥には男女平等と関連する日本社会の変化が、やはり隠されていると見るべきである。戦後の新憲法、新民法（昭和二十二年十二月「親族・相続」全面改正）により、「家制度」「家父長制」が廃止された、その影響下における夫婦関係が戯画的に暗示されているのである。

大日本帝国憲法（明治二十二年二月公布）、明治民法（後二編「親族・相続」三十一年六月公布）の下では、「家」の運営にあたって「家長」たる男性が絶大な権力を持ち、その「家長」は父親から長男へ相続されていくものであった。いわば「夫」は一家の「主人」たることを法的に保証されていたのである。しかし新憲法、新民法によって

「家制度」「家父長制」が廃止され、「夫」は必ずしも「主人」と言えなくなってしまった。右の場面は、このような日本社会、家庭内の変化を多分に反映しているのである。

一方、猿沢三吉と学生メカケ真知子の場合。大学生である真知子が初めは「アルバイトサロン」という、当時ブームとなっていた酒場で働いていたこと、その後「アルバイト」でメカケになったという設定には、「かつぎ屋」をしていたランコと同様、女性のなりふりかまわぬ逞しさ、したたかさが、同時代の風俗と併せて表れている。加えてメカケが旦那より強く、旦那がメカケに「道具視」されるという、この男女関係については、「男の学業を貫徹させるために、女が遊里に身をおとすというのは昔からよくある例だが、この場合はその逆ではないか」とも記されている。この一文と「つむじ風」連載中における「真知子」の登場時期を考えると、真知子と三吉の関係にも、やはり戦後に為された男女関係の改革が隠されていよう。「真知子」の登場は、先にも触れたように『東京新聞』昭和三十一年六月十三日付、「つむじ風」連載の第八十二回からであり、それより約三週間前の五月二十一日、数年前から検討、審議されてきた「売春防止法」が成立し、二十四日に公布されていた[12]のである。

真知子は「メカケ」という〈一種の売春婦〉に自らを立たせながらも、むしろ旦那の三吉を自分の思いのまま扱ってみせる。この真知子の強気で自由な、「メカケ」の立場を逆手に取るごとき姿勢を通して、「売春」が防止された戦後社会の空気を梅崎は皮肉った。「女が遊里に身をおとす」ことが法的に禁じられ、男性による束縛から女性が解放されつつあったそのことに対して、男性側の失墜を嘲笑するべく、複雑に屈折させて表現したのである。

以上のごとく、「つむじ風」には戦後日本社会における男女関係がやや大げさに、皮肉を込めて表されていた。そうした三組の男女関係の中でも、加納明治と塙佐和子の一組については、〈男女平等〉のさらなる背景と言うべき、日本社会の問題をそこから読み取ることができるのである。

二―（1）

小説家の加納明治は物語の現在から二年前、四十八歳の時に「糟糠の妻と別れた」。それ故「身のまわりの世話をする人が、どうしても必要にな」り、「秘書兼助手」を求める「新聞広告を出し」、「塙佐和子という女性」を「採用」した。「塙佐和子はその時三十四歳」、「フチナシ眼鏡なんかをかけ、つめたいような美貌の持主で」あった。

この塙佐和子によって、加納明治の生活は次々と「改革」されていく。「睡眠時間」は「ドンピシャリ八時間。それより多くても少なくてもいけない」。「よほどの事情がなければ、十二時就寝の、八時起床」。「徹夜」は「能率が悪い」ために一切「禁止」である。「不規則な食事は改められ」「味よりも栄養を主としたものに変えられた」。「酒と煙草の量は制限ということになった」。その結果、加納明治の「身体の方」は「強健となり」、「頭脳の働き」も「俄然明晰となってきた」。しかし加納は「自分が人間でなく器械にでもなったような気がし始めてきた」。

塙佐和子は大学を卒業後、加納明治に採用されるまで、「某能率研究所、栄養研究所、某ドッグ・トレイニング・スクール、某大学心理学研究室などの勤務を経めぐって来ている」。つまり「能率」を重視し、「栄養」学や「心理学」に精通の上、犬を訓練するごとく、人を自分の指示に従わせ躾ける人物と言える。加納明治の食生活に対する「改革」は、塙佐和子のこのような知識、性格の反映に他ならない。では、なぜ梅崎春生は、塙佐和子をそのように設定したのであろうか。

加納明治は、塙佐和子を「女史、あるいは塙女史」と呼ぶことにした。「他の呼び方は」「日本的陰翳を帯びていて、面白くない」からであった。塙女史は、当初加納自身さえそう願ったように、日本的でない人物であるようだ。そのことを踏まえて、改めて塙女史の経歴に目を向けると、「某女子大学の英文科卒業」とある。日本的でない塙女史は、欧米的な価値観の持主であり、彼女の「改革」は、その価値観の表れと捉え直せそうである。

例えば塙女史は、加納宅の「台所」を「リヴィングキ

チン」に「大改造」し、「便所も腰掛式」に改めさせている。「あぐらをかいて仕事をするよりは、腰かけて仕事をする方が、身体のためにもいいし、能率的だ」と主張して「卓子と椅子をあてがい」、「長年あぐらが習慣になっている」加納を「大いに難渋」させたりもする。塙女史は間違いなく欧米風食生活の推進者である。対して加納明治は、「五十歳」という年齢から言って、明治生まれと捉えてよく、欧米風の食生活に戸惑う、いわば旧世代として表されているのである。

だとすれば、起床、就寝時刻や睡眠時間など、一日のスケジュールを細かく定めて厳守させ、何事も「能率」を重視する塙女史の「改革」は、如何にも欧米的な「合理主義」として見えてこよう。その「改革」が「身体や頭脳には好影響をあたえても、精神には悪影響しかあたえない」と「力説」する加納明治に対し、塙女史は「頭脳の働きがすなわち精神」と断じ退けている。塙女史は欧米で発達した唯物論に基づく近代科学文明の信奉者であり、加納明治は反近代的な唯心論、あるいは東洋的な立場から反発しているのである。

実際、塙女史の「改革」によって、加納明治は自分が「人間器械」にされたと感ずるとともに、塙女史その人を評して「コチコチの合理主義者」だと述べている。しかもその容貌の美しさについては、「情というものが全然こもっていない」「鉱物の美しさ」、あるいは「陶器のようにコチコチの」「美しさ」だと捉えているのである。欧米的な「合理主義」に際して、美しくとも非情で暖かみがなく、無機物のごとく硬直した物質至上主義だと解する梅崎春生の思想が、塙女史に対する加納明治の心境に表れていよう。

二―(2)

塙女史が自らの方針で供する三食について見てみたい。加納明治の日記という形で、例えば次のごとく詳述されている。

『天気快晴。朝食。果汁、半熟卵、とーすとぱん、まーまれーど。午前中仕事。

昼食。野菜入りイタメウドン（粉ちーずカケ）野菜どれっしんぐ。果物盛合（おれんじ他）。昼食後

仕事。

夕食。ぽたーじゅすーぷ、こーるみーと（牛肉、はむ）とまと、キューリ、ふるーつさらだ、強化ぱん、よーぐると。

夕食後ニ、タマニハ和風ノ食事ヲトリタシト、塙女史ニ申シ込ム。夕食後仕事』

本題から逸れるが、この他にもいくつか作中に引用される加納明治の日記は、「断腸亭日乗[13]」として纏められた永井荷風の日記を明らかになぞらえている。語り手は、この加納の日記について、「もっと齢をとって小説が書けなくなれば、こんな日記を新聞雑誌に切り売りをして生活しようとの算段なのだから、いい気なものである」ともコメントしている。梅崎春生は、この作中の小説家を通して、永井荷風を初めとする文壇の大家、明治生まれの作家たちを皮肉り、諷刺も試みている。

話題を戻す。日記に記されているごとく、塙女史が供する食事は三食とも〈洋食〉が基本である。塙女史の欧米的価値観を改めて確認できるとともに、この〈洋食〉は、別の場面で説明されるごとく、「ゲイロード・ハウザー説にのっとっ」た「ハウザー流」であることに注意したい。

ゲイロード・ハウザーとは、アメリカの栄養学者で、彼の説く「ハウザー流」食事法を紹介した著書は、アメリカで「長い間ベストセラーの上位を保つていた」[14]。日本でも昭和二十六年七月、ゲイロード・ハウザー著『若く見え長生きするには―アメリカ式健康法―』（平野ふみ子訳、雄鶏社）が刊行され、「ハウザー流」は広く知られることとなった。

その『若く見え長生きするには―アメリカ式健康法―』には、訳者による「まえがき」が掲載され、「先頃アメリカの視察旅行から帰られた某博士の談」として、日本人に比して「アメリカ人の長命なこと」が紹介されている。その上、「万事に科学的なアメリカ人が、食事にも科学的な関心をはらつていること」がその「一つの原因」で、「このハウザー博士の著書が、熱狂的な歓迎をうけ」ているのも、「そのあらわれ」と記されている。

この「まえがき」から明らかなように、「ハウザー流」は「万事に科学的なアメリカ人」による「科学的」食事法として日本人に紹介された。戦争に敗れて間もない当

時の日本人は、戦前の日本的精神主義への反動もあって、さまざまな分野でアメリカ人の科学的姿勢、言い換えれば〈アメリカ式合理主義〉を取り入れようと考えた。「ハウザー流」も食事面での、その〈アメリカ式合理主義〉として紹介され、実際に広く受け入れられたのであった。

梅崎春生はエッセイ「食生活について」(昭和二十八年十二月『新潮』)の中で、人間は「自分の口にあった旨いものを食う」のが「本義であり」、「カロリーとか栄養とか、ビタミンとかミネラルとか」「それにあまりとらわれることの弊害の方が大きい」と主張し、また後年には、これもエッセイの「即席文化」(昭和三十五年十一月二十七日『週刊現代』)の中で、「味よりも栄養が第一だという文化観があって、その先鞭国にアメリカがある。アメリカというところは、食物がひどい。ひどいというのは栄養学的ではなく味覚の上である」とも書いている。加えて小説では、「つむじ風」連載より約一年半前に発表した「ボロ家の春秋」(昭和二十九年八月『新潮』)で、「ゲイロード・ハウザー博士の所論」を取り上げている。しかし主人公「僕」の敵役に当たる野呂旅人が取り入れた食事法として、つまり否定的な要素と絡めた描写であった[15]。梅崎春生は、合理主義的に栄養重視した〈アメリカ式〉食事法に拒否感を抱いており、その否定すべき一例として「ハウザー流」があったと言えよう。

つまり欧米的価値観を持つ塙女史は、特に食事に際して、「ハウザー流」なる〈アメリカ式〉を押しつけていく人物であり、「タマニハ和風ノ食事ヲトリタシ」と不満を抱く加納明治は、梅崎春生の代弁者として、終戦以来、日本社会にさまざまな方面で急速に広まりつつあった〈アメリカ式〉への反発、反論を表しているのである。

ちなみに陣太郎の代役で加納宅を訪れた泉竜之助に向って、「フライパンをかまえて、にらんでる」塙女史の姿は、「砂川町の警官みたい」だと形容されている。昭和三十年九月十三日、砂川町・米軍立川基地拡張の際、いわば米軍のために反対派住民を押しのける役割を務めた日本の警官隊のイメージまでもが塙女史には与えられているのである[16]。この表現を見ても、塙女史はアメリカを擁護し、〈アメリカ式〉を体現する人物であること

が確認できよう。

ここに来て浅利圭介とランコの結婚式が「昭和十六年十二月八日」、つまり日本がアメリカに敗れた戦争を始めたその日に設定されていることが、重要な意味を持って見えてくる。しかもこの小説では、次のような二つの会話も為されていた。

一つは浅利圭介がランコによって部屋を納戸に移され、部屋代、食事代まで請求された際の会話である。

(圭介)「(前略) こちらの弱味につけこんで、巧妙にたたみかけてくる。おばはんのやり方はまるでアメリカ的だ。すこし侵略的に過ぎるぞ」

(ランコ)「おや、何時侵略しました?」

「したじゃないか! 沖縄は返さないし、富士山は取り上げるし、砂川町や妙義山……」

「アメリカのことじゃありません!」

ランコはまた畳を引っぱたいた。

「あたしのことよ。あたしが何時侵略したかというのよ (後略)」

「沖縄」はもちろん、「富士山」や「砂川町」、「妙義山」も、アメリカ軍から基地や演習場として取り上げられた土地を指している。

いま一つは猿沢三吉と妻ハナコの会話。「アメリカがまた無断で、原爆か水爆かの実験」をしたことが話題に上り、その際の二人のやり取りである。

「またアメリカの奴がやりやがったか!」

三吉は空を仰いで長嘆息した。

「一体アメリカの奴は、日本を何と思っているんだろう。日本の政府も全くだらしがないな」

「ほんとよ。今の政府なんて、アメリカ旦那のメカケみたいなものよ」

ハナコも激昂の気配を示した。

「まるでメカケみたいに、へいこらして、言いなり放題になってるのよ。沖縄問題にしたってそうでしょ。腹が立つったら、ありゃしない」

たまたまハナコが「メカケ」という言葉を口にし、しかも自分のメカケ真知子がハナコの言葉とは真逆の態度であることにより、三吉は内心動揺、なんとか取り繕う様子がこの後、描かれている。

夫が妻に圧倒される圭介とランコはもちろん、夫が妻へ、隠し事の発覚を恐れる三吉とハナコの場合も、女性が男性より優位に立った会話と言える。これらを通して、梅崎は読者から笑いを取り、また戦後の男女関係を誇張気味に表現したのである。しかも、右二つの会話には、決して正面切った形でないものの、当時の日米関係、ことに米軍基地問題への批判が表れている。圭介とランコの結婚式の年月日と併せて、日米関係に対する梅崎の関心の高さを読み取ることができるのである。

実際、梅崎春生は昭和二十年代後半から三十年代初頭にかけて、エッセイ[17]や小説で、日米関係について、しばしば取り上げていた。特に短篇小説「侵入者」（昭和三十一年二月『新潮』）では、「この家がはっきりと自分のものであるという自覚」を持てず、「俺の庭は、俺の庭みたいに見えて、俺のために樹がたくさん生えているように見えて、ただそう見えているだけ」だと気付く主人公「彼」を描くことで、日本防衛のためという建前で米軍に基地を提供し、実際はアメリカの軍事戦略に利用されている日本の社会状況を寓意していた（拙論「梅崎春生『侵入者』論―社会諷刺の小説―」、平成十五年十一月『近代文学論集』第29号）。梅崎春生が終戦後の日米関係に深い関心を抱いていたことは確実であり、「つむじ風」にも、その作者のモチーフの一端が表れているのである。

そもそも戦後日本の〈男女平等〉ならびにそれに関わる一連の法規改正は、米軍占領下に生まれた新憲法に保証されており、その意味でアメリカの指導下にあったと言っても過言ではない。またこの戦後日本の〈男女平等〉には欧米の習慣、〈レディ・ファースト〉の影響もあろう。

かくて「つむじ風」に描かれた三組の男女は、男性より女性が優位にある関係において、実はアメリカが戦後の日本社会に与えた影響と密接に結びついているのである。

塙女史と加納明治は、このアメリカが戦後の日本社会に与えた影響について、より直接的かつ具体的に表した関係と言えよう。〈塙女史〉は戦後の日本に半ば押し付けるごとく侵入してきた〈アメリカ文化〉を、〈加納明治〉はその〈アメリカ文化〉を初めは歓迎しつつも、やがて

戸惑い、次第に抵抗を感じ、ついには受け入れざるを得ない日本人の姿を、それぞれ象徴しているのである。

二―（3）

物語の終盤に至って、陣太郎に対する加納明治と塙女史の立ち向かい方の違いに目を向けたい。

加納明治は、「御譜代会」など松平家の内情に通じているかに見せる陣太郎を半ば信用し、撃退できず、次々と金を奪われていく。対して塙女史は「そんなの、ちょっと本で調べりゃ、すぐ判りますよ」と冷静に判断し、「世田谷の松平家に、電話をかけ」ようと提案。最後は塙女史自身が「世田谷の松平家」を訪ね、陣太郎が松平家御曹子の「ニセモノ」であることを突き止める。見破られた陣太郎は人々の前から遁走し、加納明治も金銭被害からようやく救われる。

明治生まれの加納が「松平家」に未だ幾分か畏敬の念を抱き、封建主義的な思想の名残をとどめるのに対し、塙女史は〈アメリカ文化〉の崇拝者であった。だからこそ「松平家」という本来は実態のない封建的な権威を畏れず、陣太郎が「ニセモノ」であることを看破できたのであろう。この塙女史による陣太郎撃退をより深くまで読み込めば、戦後のアメリカ占領下における民主化政策によって、日本社会から封建的な空気、権威主義的な思想が一掃された、そのアメリカ文化の侵入による好結果が暗喩されていると言えよう。

ちなみに浅利圭介の妻ランコは、戦後日本の夫人らしく夫に強い姿勢で臨みつつも、夫や長男へ、階級的にも偉くなれと要求している。そこに注目すれば、彼女も封建主義的な思想の名残をとどめる人物と言える。ランコが陣太郎に関心を示し、夫を陣太郎の「家令か何かに使って貰ったらどうだろう」と考えるところを見ても、それは明らかである。戦後の夫人たちが、地位を高めつつも、しかし彼女たち自身が日本の悪しき伝統から、実は抜け出せていなかったことを、このランコの姿が代表する側面もあろう。

つまり梅崎春生は戦後の日米関係において、アメリカ文化の侵入を批判するだけでなく、日本社会の旧弊さにも目を向けていた。日本がアメリカによって救われた部

分もあったと捉えていたのである。

最後に物語の末尾に目を向けると、加納明治と塙女史のその後の関係が、後日譚として次のように描かれている。

加納明治はあれ（塙女史が陣太郎を撃退して）以来、塙女史にすっかり頭があがらなくなり、塙女史の言うままの理想的生活をつづけている。その結果、とうとう小説が書けなくなり、近頃ではせっぱつまって児童ものに転向、これは案外好調で、次期の児童文学賞の有力候補の一人に目されている。

「塙女史の言うままの理想的生活」とは、もちろん「ハウザー流」をはじめとする、合理主義的な〈アメリカ式〉食生活である。

梅崎春生がどこまで意図したかはともかく、塙女史を〈アメリカ〉、加納明治を〈日本〉に置き換えて読むことで、この後日譚には以下のごとき解釈が成り立とう。

すなわちアメリカが戦後の日本を民主化し、封建主義的かつ軍国主義的な思想を一掃してくれたお陰で、日本国民、政府はアメリカに「すっかり頭があがらなくなり」、アメリカの「言うまま」になってしまったことが暗喩され、また「その結果」として、小説家が本業の小説を書けなくなってしまうように、以後の日本から日本本来の良き伝統文化さえ失われていくであろうことが予見されている。さらには「児童もの」、つまり子供向けの作品を加納がやむなく書き出し、しかしそれが「好調」となっていくように、日本という国がアメリカの子供同然となり、アメリカの庇護下に置かれ、高度経済成長もその中で実現していく。そうした日本の未来像まで、梅崎春生は半ば無意識のまま、その鋭い感性によって見通していたと言い得るのである。

おわりに

かくのごとく「つむじ風」は、三組の男女関係を通して、戦後日本の〈男女平等〉を描きつつ、その背景にある日本社会へのアメリカ文化侵入について鋭く諷刺した側面を持つ。そこに込められた梅崎春生のメッセージは、単なるアメリカ批判にとどまらず、日本社会の弱点まで捉え、先々の予見さえ含まれていた。

梅崎春生は先に「侵入者」で米軍基地問題を寓意し、その後連載した、この「つむじ風」と併せて、二作とも「もはや『戦後』ではない[18]」と言われた昭和三十一年に発表している。時代の変化に敏感でありつつ、表面的な復興には惑わされない作家の洞察力が窺われよう。加えて「つむじ風」の場合、その戦後十一年目の時点で、アメリカ文化の侵入を男女関係、食生活という日本人の日常レベルより捉え、しかもユーモアに溶け込ませて表したところに独自性が存する。一見〈戦争〉から離れた日常を描きながら、「昭和十六年十二月八日」に遠い起点を有し、終戦以来、平成の今日まで続く日米関係のあり方について、早くから、さりげなく抉り出した長編小説として、「つむじ風」は梅崎春生文学においてはもちろん、戦後文学の中でも特異な一作と見做せるのである。

この小説には、他にも例えば泉恵之助と猿沢三吉による、銭湯主人同士の対立があり、また先にも触れたように、泉竜之助と猿沢一子、陣内陣太郎と西尾真知子という、二組の若い男女関係も描かれている。それぞれ作者独自の表現が認められ、「つむじ風」は、まさに多面的な小説と言える。梅崎春生文学に秘められた、さまざまなモチーフ追究のためにも、さらなる考察を後日に期したい。

注

(1)単行本『つむじ風』は昭和三十二年三月、角川書店刊。

(2) 和田勉は『梅崎春生の文学』の中で「つむじ風」を取り上げ、「ほのかなおかしみがあ」り、「筋はおもしろく進展し」た、梅崎春生の小説の中でも「ユーモア大衆小説」の「系列」と評している。戸塚麻子は『戦後派作家　梅崎春生』(平成二十一年七月、論創社)の中で、「つむじ風」について、「話の面白さに重点が置かれ」た小説だと指摘している。

(3) 他にも、例えば日沼倫太郎が「書評.梅崎春生『つむじ風』」の中で、「権威や因襲のかげにかくれた現代人のウジウジした生活を嘲笑し」た「諷刺小説」と評している。

(4) ホステスをアルバイトが勤める「アルバイトサロ

ン」（通称「アルサロ」）が、昭和二十五年八月十五日「大阪千日前に初めて」「開店」した。以後「全国的にアルサロ・ブーム」が起こった（平成十一年三月十四日『朝日クロニクル週刊二十世紀』第六号）。

（5）梅崎春生ら『近代文学』同人に対し、自らを松平姓で徳川慶喜の曾孫だと騙った、根本茂男なる人物が陣内陣太郎のモデルである。梅崎春生「ふしぎな人物」（昭和三十二年七月六日『東京新聞（夕刊）』）「不思議な男」（昭和三十二年十月『オール読物』）参照。

（6）梅崎春生は「砂時計」において、例えば『朝日新聞』掲載の東京都「バイ煙対策協議会」に関する記事をヒントに「カレー粉対策協議会」を設定し、同じく「聖母の園・養老院」火災の記事から想を得て、夕陽養老院の在院者が院長に火災対策について詰め寄る場面を描いている。「砂時計」には『朝日新聞』記事に拠った設定、表現が他にも数多く見られる。詳細は拙論参照。

（7）同記事は「つむじ風」連載開始より約一カ月前、昭和三十一年二月二十五日『朝日新聞（夕刊）』掲載。「国電小岩駅南口の松の湯」が「昨年三月から大人十二円を断行し」「東都浴場界の幹部たちがなだめすかして毎夜のように値上げ方を談判している」ものの、「十二円」で「がんばり続けている」ことを報ずる。「松の湯のすぐ隣の大黒湯」は「新築一年のキレイな湯だのに、十五円だから客がつかないとあって、たまりかねて」「『ウチも値下げする』と一月末に申入れた」とも記す。「すぐ隣」の二つの銭湯による、この「値下げ」にまつわる事実を発展させ、隣接した泉湯と三吉湯の対立、特に「東京都浴場組合」「理事」の「勧告」にも応じない、その値下げ競争が生み出されたと言えよう。泉湯が「代々」の「シニセ」である一方、三吉湯が新しい「チェーンストア式」である設定も、「大黒湯」が「新築一年」であることに想を得たと見られる。

（8）昭和三十一年の『朝日新聞』には「集団の青春『アルバイト学生』と『夜学生』の違い」（一月十四日）、「学生生活の実態から見た授業料の値上げ・家庭の仕送りに限界・大きな割合、アルバイト」（二月二十日）、

「腕には自信あり！ 仕事を待つ学生たち」「ペンキ塗り奉仕をするアルバイト学生」（三月四日）等の記事が見られる。

（9）猿沢三吉が「女房の眼をぬすんで近ごろメカケを囲」ったことは、三吉が最初に登場する連載第二十四回（三十一年四月十五日『東京新聞』）にまず記されるが、そのメカケが「真知子」という「学生」であることは、連載第八十二回（三十一年六月十三日『東京新聞』）でようやく明らかになる。つまり梅崎春生は、猿沢三吉に登場当初からメカケを囲わせておきながら、そのメカケのイメージはまだ定まっておらず、連載を進める途中で目にした「ある生活」第二十六回から想を得て、また後述する「売春防止法」の影響もあって、学生アルバイトのメカケを創造したと見ることができる。

（10）以下の記述は阿部恒久・佐藤能丸『通史と資料 日本近現代女性史』（平成十二年十二月、芙蓉書房出版）、井上輝子・江原由美子編『女性のデータブック』（平成三年四月、有斐閣）に拠った。

（11）単行本『女性に関する十二章』は昭和二十九年二月、中央公論社刊。

（12）注（10）に同じ。

（13）大正六年九月十六日から昭和三十四年四月二十九日に至る永井荷風の日記。『新生』（昭和二十一年三月～六月）をはじめ、『中央公論』などに発表。

（14）平野ふみ子「まえがき」（『若く見え長生きするには―アメリカ式健康法―』）。

（15）野呂旅人が「自分のこの食生活は、かのゲイロード・ハウザー博士の所論にヒントを得て、自分流に考案した」と「タンカを切」るのに対し、「僕」は「信念もクソもない、ただの経済食」「単純なケチンボ精神」だと否定している。

（16）梅崎春生は「砂川」（昭和三十年十一月『群像』）で、米軍立川基地拡張のため強制測量が為された当日について報じていた。

（17）注（16）に挙げた「砂川」の他にも、梅崎春生は、例えば「保安隊航空学校見聞記」（昭和二十八年四月『群像』）で、「ここは日本保安隊の航空学校であ

りながら、日本の土地ではない。米軍用地なの」だと記す。

(18) 中野好夫「もはや『戦後』ではない」(昭和三十一年二月『文芸春秋』)、経済企画庁『昭和三十一年年次経済報告(経済白書)』(昭和三十一年七月)参照。

*梅崎春生の作品引用は、全て新潮社版『梅崎春生全』全七巻(昭和四十一年十月〜四十二年十一月)に拠った。引用文中、旧字体は全て新字体に改めた。